宮川　（神奈川県）

服部あゆみ

私が住んでいる神奈川県の横浜市金沢区には昔から存在している川が二つある。名前を侍従川と宮川といい、前者は歌舞伎や浄瑠璃などの演目で知られている『小栗判官・照手姫』に登場する姫に仕えていた侍従が身投げした川にちなみ名づけられたとされる。ここでは後者の川について紹介したい。宮川は平潟湾という規模の比較的小さな湾に流れ込む川の一つであり（もう一方は侍従川）、鎌倉時代以前からの古い歴史を誇っている。ここで、金沢区の概要を短く述べたい。

金沢区は横浜市の最南端に位置し、その面積は 31.00 平方キロメートル、人口はおよそ 21 万人である。海岸線の埋立地と昔ながらの山、平野から構成されている。横浜市唯一の自然海浜と市内最高峰の大丸山があり、山と海が共存している地域といっても過言ではない。鎌倉時代には港町として栄え、北条氏により鎌倉と現在の金沢区を結ぶ朝比奈切り通し（国指定史跡）や氏ゆかりの称名寺、また武家の文庫であった金沢文庫が造られた。また幕末の浮世絵師、歌川広重がその景色を浮世絵として残している（『武州金沢八景』）

乙艫の帰帆

洲崎の晴嵐

http://www.city.yokohama.jp/me/kanazawa/hiroshige.html

この二枚に共通していることは水の存在である。実際にその他の作品も水に焦点を当てている。これは金沢区が幕末において、いかに水と密接に関わって生活を営んでいたかを証明するものである。かつては塩や海苔の生産がされていた。海と山が共存している地域とはいえ、残念なことに現在では広重が見た景色そのままを見ることは出来ない。金沢区を大きくえぐるような形で入っていた湾は昭和時代から徐々に埋め立てられていき平地にな

ってしまったからである。しかし、水が地域に占める割合は減ったものの、住民のそれと関わって生活するという“姿勢”はしっかりと長い歴史の中で受け継がれていると言って良い。(ちなみに洲崎および周辺部は漁業が営まれており、私有の船の停留所として現在も存在している)。受け継がれてきたものとして川が挙げられるのだが、ここで宮川の登場である。

先にも記した通り、宮川は平潟湾に流れ込んでいる川に一つである。これを上流・中流・下流に区分して現在の様子を見てみたい。

上流：源流とされているのは関東学院大学金沢文庫キャンパス周辺の森からである。この付近は自然も多く、農作業を営んでいる。このような風景は最近横浜市内でも比較的珍しいのではないかと考える。農作業に宮川の上流から来る水が大きく関わっていることは言うまでもないだろう。金沢区が変貌していく中、昔からの景色や自然を保護していこうという動きも出てきた。最近では自然愛護会が宮川の上流に再びほたるが生息出来る環境づくりを目指し、地域住民と『ほたる池』を造成していると聞く。

中流：私の家の真下には『釜利谷アメニティ』という遊歩道があり、その横を幅 30～60ｃｍほどの小さな川が流れている。それが上流から流れてきた宮川の途中経過の姿であるのだが、人々の生活に最も関わりの深い箇所であると考える。20～30 年前の川幅は今よりも広く、農作業に必要な水をここから引いていたらしい。現在は上流を中心に営まれているが、かつては中流まで田畑が存在していたことを表している。現在での宮川中流と人々との関連はどうであるかというと、遊歩道にみられるように地域住民の憩いの場になっている。ベンチも設置されているため、お年寄り等の健康維持のため散歩のコースとして知られており、平日・週末関わりなく川の周りには人が集まっている。また、植物に水をあげる際、宮川の水から汲んでくる場合もある。どうやら川は家計の水道代を助ける働きもしているらしい。比較的若い年齢の人もこれを行っているということは、川を通じて高齢層から若年層へ“生活の知恵”が伝授されているといってよいと考える。また、私が見かける風景として小学生のザリガニ釣りがある。釣ったザリガニが道路に置き去りにされているのは何とも淋しいのだが、放課後の遊び場として宮川中流は一役かっている。そのせいか、ここ周辺でゲームをしている小学生はあまりいない気がする。ザリガニのほかに小さな蟹や小魚、鯉、アメンボなどが生息しているが、調べれば他にもいそうである。これだけの生物が存在しているのは川をきれいに保とうとしている地元の人々の努力があるからだと思う。私が学校から帰ってくる途中、周辺の住民が川に落ちているゴミや

流れを止めないように落ち葉拾いをし、美化活動を行っている姿を見ることは日常で一般的に行われている。

下流：宮川の下流は長い間環境の整備や改修工事がされている部分である。私は現在大学の三年生だが、通っていた中学校前を通って平潟湾へと流れる下流付近は未だにその手を休ませたことがない。それでも大分完成に近づいているそうなのだが、金沢区が宮川の下流工事で心がけていることは“水に親しむことの出来るスペース”を造ることと、水による災害を防止することであるという。左下の写真はまさに水との触れ合いを目的に作られた『宮川宿公園』である。写っている階段は川へ降りることが出来き、イベントの際にはここからカヌーを出したり釣りをしたりと活用方法は様々である。右下の写真は手子神社前の宮川の様子である。これらはつい最近整備され現代の形になっており、大雨による川の増水を防いでいる。住民を保護し、川との共存を持続させるためにも、改修工事や維持管理を続けていく方針だそうだ。現在清浄活動の甲斐あってか、カモやサギ、カメの姿を見ることが出来る。また金沢区では緑化の促進を図り宮川の護岸に桜並木を復元しようと計画しているが、それも着々と実行されている。（実際に左下の写真を少し行くと、川を挟んだ両岸に桜の木が植えられている）。

宮川は地域住民に愛されている存在であると思う。適切に管理され、見捨てられてはいない。少なくとも住民は川との共存を望んでいるし、農業を営んでいる人や川に面して生活している人にとってなくてはならない、生活の一部としてその存在感を示している。しかし、川自身はどのように感じているのだろうか。改修工事が進んでいくと確かに安全性は向上するのだが、その代償として川の原型が破壊される。自然に近い形ではなくなっていることは、『釜利谷アメニティ』でもみられるように、その需要が減少すると川の規模も小さくなるという比例関係を構築する。川の立場になって考えてみると、幸せか泣いているかは人間に断定出来ない。幸いなことに、金沢区は取り組みの一つとして一年に一度『金沢水の日』を設定し、“雨水を保水し、水に養分を与える森、その水が海に注ぐ川と、自然の水循環要素が豊富なまち金沢”というスローガンのもと、人間の生活と密接に関わって

いる水を考え直す機会を設けている。今回調べてみたところ、横浜市立大学や関東学院大学が積極的に参加していることが分かった。私もこれを機に家の真下にある宮川や自分を取り巻く川・水について注意して見てみたいと思う。